

二週間くらい前の話だ。

ある暑い夏の日、痴漢に襲われていた女の子を助けた。

らしくない事をしたと、今更ながらに思う。助けた事じゃなく、感情に任せて痴漢に殴りかかった事だ。

俺は格闘技はおろか、喧嘩すらまともにした事がない。案の定、振り返りにあいて、痛い思いをした。

他にやりようはあつたはずなのに、抵抗をした女の子が痴漢に殴られた瞬間、理性が飛んでいた。

結果的にそれが時間稼ぎになり、痴漢は駆けつけた警官数名に取り押さえられ、女の子も事なきを得た。俺は警察病院に運ばれたが、大事はなく、すぐに退院出来た。

ちよつとした事件は終わり、すぐに普段の日常に戻ると思っていた。

けど、事件後すぐに件の女の子と再会した——いや、厳密には警察病院で会っている。しかし、それで彼女と会うのは最後だと思っていた。

女の子の名前は流遠るとおやみひめ。

地元の小学校に通う六年生だという。

再会した女の子——やみひめは無言で駆け寄り、俺に抱きついた。

泣いていた。

身長差があるため、俺の腰の辺りに顔を埋め、ただただ泣いていた。

子供とは言え、相手は女の子だ。どうしていいか迷ったが、俺はやみひめの華奢きゃしゃな身体をそつと抱いてやった。

いつだったか、こんな風に誰かを抱きしめた事がある気がした。女の子と付き合い合った事などないのに、不思議と懐かしい感触だったから。

その日をきっかけに、リハビリの相手という名目の妙な関係が始まった。

サイドストーリー #01

『夏祭り』

八月の最後の日曜日。

夏の終わりを惜しむかのように、今夜、近所で夏祭りが開催される。

子供の頃は夜に堂々と出歩けるというのも手伝って、喜々として参加したものが、中学生になった頃には参加しなくなった。そういったものにテンションが上がらなくなっていたし、少ない小遣いを屋台で使うのも馬鹿らしいと思っていたから。

なのにも関わらず、そろそろ暗くなってくるであろう夕方の時分に神社の境内けいだいにいるのは、一緒に祭りに行く相手を待っているからだ。

腕時計で時間を確認すると、待ち合わせ時間の五分前。そろそろ来る頃合いだと思って
いると――

「――お待たせ、アサト！」

元気のいい声が俺の名前を呼んだ。

視線を前に向ければ、こちらに駆け寄ってくる女の子の姿が見えた。

赤いリボンで纏まとめられた、見慣れたポニーテールの黒髪。少し吊つり目がちだが、攻撃的ではない。橙だいだい色の瞳。黙っていれば可愛い顔つきをしているし、将来性は充分に期待出来るだろう。

流遠るしおやみひめ。

二週間前に助けた女の子。

「……待たせすぎだ」

「えー、待ち合わせ時間の五分前だよ？」

「俺は十分前には来てた」

「そうなの？ そっか、そんなに楽しみにしてくれてたんだ」

俺の言葉を都合良く解釈し、によよと笑みを浮かべるのがイラっとした。だから、俺は以前から考えていた名前ですいつを呼ぶ事にした。

「自惚うぬぼれんな。十分前行動は基本だ――や・み・子」

「……………えっと、それはもしかして私の事を言ってるのかな？」

意外に効果があったようだ。鳩はとが豆鉄砲をくらったような顔というのは、まさにこういう顔を言うのだろう。やみひめ改め『やみ子』は、ものすごく不満そうな表情を浮かべていた。

「他に誰がいる？ 前々から思ってたが、『姫』なんてのはお前にはおこがましい。やみ子で充分だ」

「何それ!? 失礼だよー！」

「うるさい。さっさと行くぞ」

子供らしく頬を膨らませ、抗議をしてくる姿を見て気が晴れたので、目的地に行くこと
促す。

「あつ、ちよつと待ってよ！」

「ん？」

やみ子が俺の服の袖をつかんで引き止めた。まだ文句があるのかと振り向けば、妙にも
じもしした態度で、何か言いたげな顔をしている。

「何だ？」

「もう！ 浴衣だよ？ その……何か言ってくれてもいいんじゃない？」

やみ子の意図が判らず訊いてみると、焦れたようにそんな答えが返ってきた。要は浴衣
姿を褒めると言っているのだ。

実を言えば気付いていた。さらに言えば、一瞬だが見惚れていた。

小柄で華奢な身体は小学生六年生としては普通なのだろう。当然ながら色気はない。

だが、恐ろしいほどに浴衣姿が様になっている。

元々、和服が似合いそうな雰囲気はあった。しかし、実際に着て見せられると、普段着
とのギャップで破壊力が増す。

——正直、綺麗だと思った。

やみ子が待ち合わせの五分前に来たのに難癖をつけたのは、それを認めるのが癪だっ
たからだ。

そして、小学生とはいえ女の子に向かって「綺麗だよ」なんて言えるほど、俺は紳士じ
やないし百戦錬磨のスケコマシでもない。

だから——

「あー……七五三みたいだな。もしくは座敷童？」

「もっと気の利いた事、言えないの!? アサトの馬鹿！ 朴念仁！ ダメ人間！」



あの後、散々、やみ子に背中を小突かれた。最初はむくれていたが、現金なもので祭り
の会場に着くと機嫌はすぐに良くなった。俺とは言えば、人が多いのに早くもグロッキー
だ。町内の行事なので、そんなに大規模なものではないが、それでも来場者は多い。

「どうしたの、アサト？」

「帰りたい」

能天気な祭りの雰囲気を楽しんでいるのだろう連れに、俺は正直な気持ちをお口にしました。

人混みは苦手だ。イベント事に積極的に参加するタイプではないし、やらなくていい事はやりたくない主義なのだ。

「まだ来たばかりだよ？ ——あ、射的だ！ アサト、やろう？」

「あの手のゲームは苦手だ。当たったためしがない」

「じゃあ、ヤキソバ食べよう！ 私、好きなんだ」

「高い。インスタントなら百円だぞ？」

「……アサト、何しにお祭りに来たの？」

やみ子がジト目で俺を見ている。

判っている。祭りなのだから、みみっちい事を言わずにテンションで楽しめばいい事くらい。

だが、それが出来ればやっている。

「——ねえ、楽しくない？ 誘って迷惑だった？」

俺が無言になったのをどう思ったのか、やみ子はしゅんとした表情でそんな事を言った。普段は明るい表情ばかりなので、不安そうな顔をされると余計に罪悪感が増す。

何と答えるのが最善か考える。だが、前述の通り、俺は百戦錬磨じゃない。女の子の気持ちを明るくする気の利いた台詞セリふなど浮かばない。

そんな気まずい空気が流れた時——

「——あれ、やみひめ？」

やみ子とは別の女性の声が割り込んだ。

「あ、くらう」

「やっぱり。この人混みだから会う事はないと思ってたけど、偶然だね」

声の主は俺と同じ年くらいに見える少女だった。長い黒髪をアップにし、白い浴衣を着ている。おとなしめの雰囲気だが、そこはかとなく漂う色気がある。かなりの美人だ。

「近所さんだろうか？ もしくは親戚のお姉さんとかかもしれない。

「そうだ、紹介するね。私の友達でクラスメイトのくらう」

「初めまして。クラウ・P・ブランです。この人がやみひめの『お兄ちゃん』？」

「うん！ あ、でも本人の前で言わないで。嫌がるから」

「そうだったね。すみません、たちばな橘さん」

外見通りの落ち着いた物腰。礼儀正しいが、堅苦しい感じはなく、むしろ意外な親しみやすさを感じさせる少女だ。

しかし、やみ子とクラウの会話に何か違和感を感じた。それは――

「なあ、さっき『クラスメイト』って言ったか？」

「え？ 言ったけど」

「やみ子……お前、小学生だったよな？」

「なあに、今更……あー、そうか」

どうやら、やみ子は俺の言いたい事に気付いたようだ。心なしか、うんざりしてるように見える。

「くらう、身分証ある？」

「あるよ」

やみ子の言いたい事を察したのだろう、クラウは持っていた巾着袋きんちやくから保険証を出して俺に見せてくれた。写真は間違いなく本人だ。生年月日から現在の年齢を計算する……間違いなく小学六年生だ。

「マジか……」

思わず、やみ子とクラウを見比べてしまう。どう見ても姉妹だ。同級生には見えない。

「やっぱり。アサトもくらうの事、高校生くらいだと思ったんでしよう？ 美人だとか思ってたんでしよう？」

と、拗ねた口調で言うやみ子。恐らく、比較されて子供に見られるのが面白くないのだろう。

「駄目だよやみひめ、橘さんを困らせちゃ。それに、私なんて背が高いだけで、やみひめの方が可愛いよ。ですよね、橘さん？」

「いや、そんな事は――」

ない、と続けようとして出来なかった。クラウの目が『そうだと言え』とアイコンタクトを送ってきたからだ。

それで察した。この子は外見や物腰だけでなく、精神的にも大人なのだ。

「そうだな。まあ、歳相応でいいんじゃないか？」

これ以上、やみ子の機嫌を損なう訳にもいかないので、クラウの配慮に甘える事にした。本当に良く出来た子だ。

「……本当に？ アサトは私の方が良い？」

不安げにこちらを見上げるやみ子の目は、少しだけ潤うるんでいた。断じて邪よしまな気持ちなどないが、女の子の上目遣いは反則だと思った。

「……本当だよ。だから、そんな顔すんな」

やみ子の顔が正視出来なかったので、少しだけぶっきらぼうな言い方になってしまった

が、やみ子は俺の言葉に表情を輝かせた。

「そっか……えへへ」

「よかったね、やみひめ」

笑い合うやみ子とクラウ。学校でもこんな感じなのだろう。本当に仲がいいのだと容易に想像がつく。

「——なんだ、流遠も来てたのか？」

そうしていると、新たな声が割り込んだ。今度は男だ。

「神譲先生、こんばんは」

「おう。クラウ、急に走るなよ。少し探したぞ？」

「うん。ごめんね、ハン」

「いいさ。すぐに見つかったしな」

現れた男はやみ子に声をかけた後、クラウを少しだけ叱ったが、特に怒っている訳でもないようだ。雰囲気から見て、クラウの兄だろうか？

「神譲先生。私達の担任だよ」

俺の表情から察したのか、やみ子が男を紹介した。

以前から思っていたが、やみ子は割りと察しがいい。俺はあまり考えている事が表情に出ないタイプだが、やみ子には判るらしい。

「この子達の担任の神譲ハンだ。君は？」

屈託のない表情で自己紹介をすると、初対面であれば当然にしてくるであろう質問をしてきた。

「……橘アサト。高校生です」

恐らく年上であろう相手なので、一応、敬語だ。

「流遠とはどういう関係なんだ？」

「関係と言われても……」

面倒くさい。出会った経緯を説明するのもそうだし、相手は聖職者だ。女子小学生に不埒な行いをしようとしていると誤解されたら最悪だ。

「流遠、どうなんだ？」

質問の矛先がやみ子に向いた。

『下手な事を言うな』とアイコンタクトを送る。やみ子はそれをどう解釈したのか、

「アサトは私の王子様なんです！」

と、のたまった。

「……ほう？」

最悪だ。先生の視線の温度が下がった気がした。

「意地悪な事ばかり言うけど、本当はすごく優しいんです」

「……それで？」

いかん。先生の視線が警戒から危険に変わった気がする。

「私が不安になると、そつと抱きしめてくれるんです」

照れ臭そうに言うな。無駄に『女』の顔をするな。

「……なるほど」

終わった。先生の視線が完全に危険人物に向けるそれになっている。

「橘君。何か弁解はあるか？」

「あなたは誤解してる。俺は何もやましい事はしてないし、するつもりもない」

「小学生にあんな顔^{あんな顔}をさせる時点で有罪だ。何が目的だ？ いや、言わなくていい。言えないようにしてやるからな」

「言わせろよ……」

にじり寄ってくる先生の足運びは、なんとという^{すき}か隙がない。俺は素人なので判らないが、もしかしたら武術か何かをやっているのかもしれない。

「そう言うあなたは何なんだ？ どうして生徒と祭りに来てる？ そつちこそ、淫行教師なんじゃないだろうな？」

「な!? 言うに事欠いて……!」

「凶星か？ 教師もしよせんは男だな。クラウの小学生とは思えないプロポーシヨンに、あんたのレーザー・ブレードはフル出力状態なんだろう？」

「ふざけるな！ 大事な生徒を相手にそんな事を考えるか！」

もはや敬語を使う余裕もない。こうなったら口喧嘩に持ち込んで有^{うやむや}耶無耶にするしかない。

「くらう、『いんこうきょうし』って何っ」

「やみひめ、それより型抜きやりに行かない？ 私、得意なんだよ」

クラウが気を利かせてやみ子を屋台に誘導する。例のアイコンタクトで『しばらく離れるので、話を済ませろ』と言い残して。しかし、本当に良く出来た子だ。

考えてみれば、口喧嘩の末にリアルファイトに及ぶ可能性もある。教師が暴力沙汰など起こすとは思えないが、痛いのは御免だ。俺は仕方なく、やみ子との関係を一から説明した。

学校側には話が伝わっていたのだろう。先生は俺の話をすんなりと信じてくれた。

「そうだったのか……。悪かったな、失礼な事を言って」

「別にいい。そういう事件も多いらしいしな」

「それと、俺からも礼を言わせてくれ——ありがとう、俺の生徒を助けてくれて」

「……やめてくれ。たまたまだ」

この人は自分の非を認められて、素直に感謝を表現出来るらしい。これが大人なんだろうか。

「あんた、ずいぶんと若く見えるが……本当に教員免許持ってるのか？」

相手が頭を上げるのを待って、疑問に思っていた事を口にする。

「一応、まだ学生なんだ。今いる学校には特別教育実習生として来てる」

先生の話を要約すると、彼の通っている大学には特別な制度があるらしい。なんでも、三年生のうちに卒業に必要な単位を取得し、いくつかある条件をクリア出来れば、最後の一年間を教育実習生として過ごせるらしい。

「その制度を利用して、あの子達の担任をやらせてもらってる。もちろん、サポートをしてくれる先生も別にいる。実質的には、そっちが本当の担任で、俺は副担任だな」

「そうか。じゃあ、来年には大学を卒業して、あいつらの学校からもいなくなるのか？」

「……そうだな。あの子らと別れるのは残念だが、どの道、六年生は卒業だ。同じタイミングで学校からいなくなる。担当するのが六年生というのは、ちょうどいいのかもしれない」

そう言う彼の横顔は、心意気だけは一端の教師に見えた。



しばらくして、やみ子とクラウドが帰ってきて、元の組み合わせに戻った。彼等との別れ際、ほんの気まぐれで疑問を投げかけてしまった。理由なんてない。気まぐれだから。

「なあ、大学って楽しいのか？」

俺の疑問に少し意外そうな顔をして、彼はこう答えた。

「本人の心掛け次第だ。何もしなきゃ、何もないままだよ」

そう言って、今度こそ二人は雑踏に消えていった。

「……………」

その言葉に、しばらく俺が無言でいると、

「ねえ、神かみじょう議先生と何話してたの？」

と、自然に隣に並んでいたやみ子が訊きいてきた。

「別に、大した話はしてない」

「そうなの？」

「ああ」

「ふくん。そっか」

普段通りのやり取り。

そういえば、クラウ達が現れるまで気まずい雰囲気だったのを思い出す。

「……悪かったな。せつかく来たのに、空気が読めない事言って」

「あ、ううん！ アサトがこういうの興味ないって、なんとなく判ってたし。来てくれただけで嬉しいし。だから、気にしないで」

そう言って笑みを浮かべるやみ子の表情に、少しだけ罪悪感が薄れた気がした。

「そんなじゃ、適当に回って、食いもんはお土産みやげにして家で食べ。遅くなる前に帰るぞ」

「——！？ うん、行こう！」

「おい、引っ張るな！ 勝手に腕を組むな！」

「はぐれたら困るでしょ？」

「だからって……」

俺が抵抗しようとする、やみ子は組んだ腕にぎゅっと力を込めた。そして、上目遣いでこちらを見上げ、少しだけ間を置いて言った。

「——ちゃんと掴つかまえててね？」

その表情があまりに強烈で、俺は息を呑のむしかなかった。

やはり、女の子の上目遣いは反則だ。



それから、一通り会場を見て回り、祭りを後にした。俺の両手はやみ子が買った屋台の袋ふくで塞ふがっている。買い過ぎだ。

帰り道で、やみ子は妙に静かだった。疲れもあるのだろうが、祭りの終わりと夏の終わりに感傷的になっているのかもしれない。

思えば、この夏の出来事は大きかった。明日から、俺は高校、やみ子は小学校が始まる。

なのに、それに現実感が湧かない。ずっと夏休みが続くような気がするの、ただの願望だけではないと思う。

やがて、やみ子の家の前に到着した。

結局、彼女はここまで一度も口を開かなかった。

やみ子は屋台の袋を受け取り、「おやすみ、アサト。今日は付き合ってくれてありがとう」

と言って、あっさりと唾きびすを返した。

わだかまりはもうない。祭りも十分に堪能たんのうしたはずだ。だから、これで別れても何の問題もない。どうせ、あの公園でまた会う。まだリハビリは続くんだ。

だけど――

「――やみ子」

俺はその背中に声をかけた。

振り返ったやみ子に、少しだけ迷ってから、やはり言うべきだろうと決めた。

「あー、なんだ……その浴衣ゆかた、よく似合ってるぞ」

「え……?」

「それだけだ。そんじやな」

今度は俺の方が唾を返す番だ。これ以上は平静が保てない。

恥ずい。やっぱり言わなきゃよかった。

今更、そんな後悔をする。さっさと帰って、寝て、忘れてしまおう。

「――アサト!」

そんな俺の心情など無視して、やみ子が俺の名前を呼んだ。音量と気配で判る。すぐ真後ろからだ。

「何だよ?」

仕方なく振り向くと、『しゃがめ』とジェスチャーで伝えてくる。抵抗する気力もないので、言われるがままにしゃがむと、やみ子と視線が合う。

やはり小さいなと思っていると、唐突に左の頬に、少し湿った、だけど柔らかい感触がした。

「……………な――」

何するんだ――と問うまでもない。やみ子の顔が間近にある。それが答えた。

「えへへ。さすがに唇は恥ずかしいから、また今度――ね?」

じゃ、じゃあね――と脱兎だつとの如く家の玄関に向かって駆け出したやみ子の顔は真っ赤に染まっていた。

そんなに恥ずかしいならやるなよ――と思ったが。

「……恥ずかしい事言った俺も同じか」

そう思い直して、俺も帰路に就く事にした。



こうして、暑い夏は終わりを迎えていく。
左の頬ほおに、ほんの少しの温もりと感触を残して。

END

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』の番外編、サイドストーリー#01をお届け致します。

諸事情により、九月は『ゾイやみ』本編・第二話の掲載はありません。なので、残暑見舞い用に描いたイラストを基にした今回の話でお茶を濁させてください。とはいえ、十ページ以上あるので、それなりに読み応えはある。多分、あると思う。あるんじゃないかな。ま、ちよつとは覚悟はしておいてください(さだまさし『関白宣言』より)。

今回はサイドストーリーという事で、アサトの一人称です。現実世界リアルに合わせて、夏祭りの話にしました。時間軸としては本編の前ですね。

番外編をやるにはまだ早い気もしましたが、ネタバレもないし、くらうと神譲先生も出せたので、個人的には気に入ってます。恐らく本編が終わってからになります。くらうの一人称の話も予定しますので乞こうご期待。

では、ここらで謝辞を。

まずはくらうと神譲先生のパートのチェックをくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。今後も大事に書かせていただきます。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。幼女なヤミヒメ——やみ子はお楽しんでいただけですしょうか？ 少し不安です。

それでは、次こそ本編・第二話でお会いしましょう。

2014 / 08 / 30 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る